

二〇二二年六月一六日

待ち合はせ人らし手を振るサングラス
紫陽花の毬が膝擦るベンチかな
目に追ひし子の背番号雲の峰
日を弾く銀の一筋蜘蛛の糸
手配写真滲みて梅雨の掲示板
豪商の栄華の名残夏座敷
ねむごろに糠床混ぜる梅雨しめり

二〇二二年六月一五日

かな文字を描くごとくに恋螢
行列に粉黛の妓も御田植
炎昼に号外告ぐる声高く
大楠の千手をかざす樹下涼しかり

二〇二二年六月一四日

大空の星に紛れし恋螢
星空にまぎれて消えし螢かな
延命水汲むはこちらと道をしえ
龍神の祠へ消えし螢かな

二〇二二年六月一三日

傘と傘ゆずり合ひして梅雨の露地
打ち返す波音涼し浜の朝
梶子の白夕闇にしるきかな
鏡なす水面御田植まつばかり
宇治川の梅雨の瀬波の荒々し
亀の子の落ちては上る石舞台
あめんぼう鯉の波紋を避けられず

なつき

なつき

雅流

よし子

よし子

宏虎

満天

有香

菜々

雅流

はく子

よし子

有香

よし子

うつき

よし子

こすもす

あさこ

はく子

せいじ

ぼんこ

あさこ

二〇二二年六月一二日

雨粒かはたあめんぼうか池の面
梅雨寒や明るきニュースないものか
逆上がりできたる吾子に雲の峰
麓まで包む山気やほととぎす
蒼天を貫く夏の燕かな
長雨に梶子の花錆びにけり
亦一つ音なく落ちし沙羅の花

二〇二二年六月一日

庭仕事腰にラジオと蚊遣り下げ
晩学のリュック重たし街薄暑
田の面を駈けゆく雲や梅雨晴間
早乙女ら手甲の紐を結びあひ
一穢なく掃かれし宮の庭涼し
もつれつつ川面をくだる螢かな

二〇二二年六月一〇日

競技場歓声あがる雲の峰
お辞儀する駅のポスター走り梅雨
鉄棒に数珠つなぎなる梅雨雫

百合合

満天

あおい

うつき

三刀

菜々

ともえ

きづな

わかば

満天

さつき

ぼんこ

雅流

百合合

うつき

さつき

毎日句会みのる選・二〇二二年六月一八日